

聖霊降臨後第2主日

「良き地に落ちた御言」(みことば)

ホセア10:1-2

ルカ8:1-15

(1)

大勢の群衆が方々の町から集まった時、主イエスはたとえをもってお話になりました。イエスの教えのうち、三分の一以上はたとえといい、その数は40に及びます。

主イエスは神の国の福音を宣へ伝える人を、ここでは、種蒔く人にたとえました。

主イエスの時代、種まきといえは、袋にタネを入れて四方に蒔き散らす方法とか、または、ロバの背中に、袋を左右に振り分け、袋の底に穴を開けて、種を落としながら蒔くという、まことに大雑把なしかたで種を蒔いていたようです。

ムスリム圏で伝道してきた宮川宣教師によると、イスラム圏にはヒザの申請書に宗教欄があり、そこに「無宗教」と書き入れると、「この人は人間か」と不思議な顔をされるといいます。日本の常識は世界の非常識となります。日本という国から一歩外に出ると、無宗教な人間は、まともな人間とは見られていないようです。

8章10節に、「あなたがたに、神の国の奥義を知ることを許されているが、ほかの者には、たとえで話します。彼らが見ても見えず、聞いていても悟らないためです」と主イエスは言われました。「あなたがた」とは、弟子た

ちであり、「ほかのもの」とは、大勢の群衆のことでありましょう。「神の国の奥義」とは、イエス・キリストを信じ受け入れた者たちに与えられる神の支配であります。

宗教改革者の一人、J・カルバンは、「神は全ての人の心に、宗教の種が蒔かれた」と言います。(キリスト教綱要)。

種はすでに蒔かれています。芽を出せば、30倍・60倍・100倍もの、多くの実を結びと言われています。しかし、そうなるか否かは、その御言を受け取る・聞く態度如何にあると主イエスは言われます。

(2)

・最初の「種」は、「道端」(8:5)に落ちました。パレスチナ地方では、手作業で丁寧に種をまくことをいたしません。大雑把に蒔くので、どこにでも種が落ちます。

多くの人間や動物が踏み固めた地面の上に、種が落ちました。種は地面の上にフワッと浮いています。それを鳥が見つけてついでいく光景が見られたでしょう。

多くの人に踏み固められた地面といえは、酸いも甘いも経験した人生のペテランに踏み固められてきた生き方なり、考え方といえないでしょうか。いまや何を聞くのが頑として受け付けません。年を取ればとるほど人は頑固になると言われています。人生の裏も表も経験しています。今や、おいそれと他人の言うことなど受け付けようとしません。しかし、こうしたことは、何も年配者だけではありません

せた。年寄り風情の若者もいます。どうせ人間の頑固さは、年齢だけでは計れません。人間の本质そのものが、頑固なのかもしれない。

ある人は、人間の心は、地球全体を滅ぼすことのできる原子爆弾の威力をもつても変えることができない。、それほど、ただかであるといえます。幼子といえども例外ではありません。なかなか親のいうことを聞きません。地団太踏んで、ふんぞり返っている小さなお子さんの姿を見ます。人は年と共に、教えられるようになるのです。

幼子サムエルは、神の御前に正座をなして、「ともへは、聞きます。主、お語のください」と、神の御言を聞く姿勢を整えました。主イエスは、幼子のようにならなければ神の国に入ることはできない。「とも言われました。神の求めておられる魂とは、わたしは、心碎かれて、へりくだった者と共にあり、へりくだる者の霊を生かし、碎かれた人の心を生かす」「イザヤ57:15)。そう主はおっしゃいました。

「サン」に踏み固められた土地の上に着ちた種とは、5節で「空の鳥がそれを食うてしまった」とあります。その意味は8章12節において、「御言を聞いたが、あとから悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、その人たちの心から、御言を持ち去ってしまっています。」と解説されています。

・次は、「次は、」

「土」(石地)「口語訳(とも訳されていきます。その上に、種が落ちました。しかし、「生え出たが、水分がなかったのだ、枯れてしまった」といっています。土の下が乾くから、土の下の暖かみをこもり、種はまだたく間に芽を出します。それは、御言を聞くこと、喜ぶことで止めぬますが、深く根を張ることがないので倒れてしまったといっています。その意味は、13節「試験の時になる」「一、二、三、困難や障書に出合ひて、身を引いてしまふ」「一、二、三、身をついてしまふ」と解説されています。

沖繩本島に自生しているのは「琉球松」といふ赤松です。「棕櫚の樹」ではありません。あれは観光用です。「この木は、5メートルの台風でも持ちこたえます。いざという時、深く根を張っているか否かが物をいいます。

「祈り」とは、「隠れし力」といわれます。祈りに裏付けられた神の御言は、あらゆる試験・困難と直面しても、それを乗り越える力となります。

・次の種は、「土」(真土)に落ちました「(7)」。すなわち「土」に生え出た、それを知らなかったといっています。14節にその解説があります。

「土」(真土)の中に落ちるとは、「この人たちの心です。御言を聞きはしたが、とくかくしてこころから、この世の心しかいひ、富や、快樂によつて心をなやまして、実が熟すまじいになりなさい。」

「この世に生きていければ、世の心づかい」「・富や快樂の誘惑」は誰にでもあります。仕事も大切、家事も大切、育児も手が抜けません、近所のお付き合いも大切なら趣味も大切です。あれも、これも、大切としていければ、聴いた神の御言の「実が熟するまでにならない」というのじや。

主イエスは、「神と言ふに兼ね仕える」とはできません。「・まず神の国と神の義を求めなさい」と言われました。あらためて、生活上の優先順位を考え直さねばなりません。仕事もある、勉強もある、お付き合いもある、趣味もある、しかし、その中で何を優先するのじや。

同盟教団に属する世田谷中央教会「、「丁長老」がいました。丁さんは、仕事も家庭もなにもかも、歯車が噛み合わなくなっていた時、上野の街を歩いている時、路傍伝道をしていた救世軍から一枚のトラクトを手渡されたのです。読めば、「先ず、神の国と神の義を求めよ。そうすればこれらのものは添えて与えられる」との御言が目にとまりました。そうか、なにもかも歯車が狂っているのは、もしかしたら、ここに原因があるのではないかと気づいて、その時から、日常の生活のすべてを見直します。第一に教会、第二に家庭、第三に仕事と、優先順位を決めました。さらに、会社の名前も「第三製菓」と命名しました。覚悟のほどが伺えます。如何なる事情があろうとも、この順位を変えない。それを守

り通しました。すると、しだいに家の中が平和となり、会社の経営も軌道に乗りはじめ、ついに、上場株式欄に載ることになります。さらに、息子・娘たち三人は、それぞれが伝道者になり、伝道者の妻となりました。

丁長老が、主日に広い礼拝堂で静かに身を沈めている後ろ姿を見る者は、どれほど、神の御言に生かされた者の確かさを、周囲にあかしたか計り知れませんでした。

・別の種は良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ」(8:15)とあります。その解説は、「良い地に落ちるとは、こいつう人たちのことです。正しい、良い心で御言を聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです」(8:15)。

沖縄は、全島が珊瑚礁ですから、土壌は痩せて、石が「ロロロ」としています。畑地としては、いかにも不向きです。稲作は一部でしかできません。人参・大根などは、収穫するところほとんどが二股・三股に分かれます。

ところが、それと、まさに対照的ともいえる土地が、神奈川県横須賀の先にある三浦半島の土地です。そこは、左は房総半島、右は湘南海岸・伊豆半島・箱根までも一望できます。あたり一面に、ひろびろとした畑が広がっています。

三浦半島といえば、「三浦大根」で有名です。初めて三浦半島の畑に足を踏み入れて驚きました。畑の土は、どこまでも軟らかく、足を踏み入れるとスポーと足がのめり込みます。

しかも、関東ローム層の黒々とした土です。聞けば、先代・先々にわたり土造りに励んできたのです。これほどの土壌でなければ、太くてもすくへに伸びた三浦大根は育ちませぬ。「肥地」とは、まぬいひ、こじした更地ではなごひでこじゅうか。

「おき地」「神の御言の」種「が時かねました。すると、ルカ福音書8章8節は、「100倍に実を結んだ」とありますが、決してオーバーではありません。私が聞いたところ、おひ一粒の粉（おみ）から平均9700の米粒が取れるといます。よければ、「1000倍」は決してオーバーではありません。

(3) おひ、このたとえ話を読む者の多くは、自分をどのタイプに属しているのかと考えるものです。果たして、そうした読み方が正しいでしょうか。そもそも、主イエスは「こひ、神の言葉を聞く人に、道端、石地、茨の地、良い土地という、4種類のタイプがある」とは言われていません。

礼拝に出席していながら、それを生ける神の御言葉として受け取るまでには、かなりの時間がかかるものです。わたくしたちの以前は、省みれば、「石地」や「茨の地」ところではなく、「道端」そのものではなかったでしょうか。神の御言葉を耳にしても、「ソーン・ソーン」と頭を振り振り、弾き飛ばしていたではありませんか。

「神は万人の心に、例外なく宗教の種が時

かれている」と言われていますが、現に、すべての人の内に「神の御言葉なる種」は蒔かれているのです。日本の出版物不動の第一位は、何と聖書なのです。読まれているかどうかは別です。しかし、密かに読んでいる人がいるかもしれません。小説とか新聞の中で、聖書の言葉に触れてきたことがあるでしょう。それが、友人に送られてきた言葉であったかもしれない。しかし、それを現在のよう「深く心にとめるなど」ということはありませんでした。しかし今は違います。いまは、こじゅうとして生ける神の言葉を求め、礼拝に集つてゐるのです。

わたしたちは、少しづつ変えられたのです。いばらにからめ取られつつでありながらも、それでも、時かれた種一、生ける神の言葉は、芽を出し、少しずつ、わたしたちの中で根を張り始めています。「こひまで変えられてきたのです。……と、と、と、ならば、これから、もっと良い土地へと変えられていく可能性があると、十分期待して良いのであります。

防府聖書教会の「T.Hさん」は、なかなか神の言葉を受け入れようとはしませんでしたが、ある時、急性白血病と診断されてから、次第に、神の言葉が唯一の慰めとなり、御言に生きる決意が与えられました。隅々まで御言を書き写した大学ノートが残っていました。このように、彼は、ただちに良い土地になつたわけではありません。しかし、最後まで御言が支えになったことは確かです。これをな

して下さったのは、すべて聖霊なるお方の働きのゆえ。

この響えの中心は、明らかに「良い地」にあります。「良い地」に時かれた種は、必ず、何十倍・何百倍もの豊かな実りをもたらすという事実です。その事実に驚かなくてはなりません。

ホセア10章1-2節「主はユダの人々とエルサレムに住む人々に言うわね、『あなたがたの新田を耕せ、さすればその中に種をまくな。』」新田を耕せ」とは、雑草とよぼよぼの生えた地を開墾せよ、いい加減に耕した所に種を蒔いてはならない、掘り起して、深く掘りかき直してやる言わねである。

深く耕せば良い土地になるのです。生まれつきわたしの内にあるまよひまなガラクタが取り除かれて、更地にされねばなりません。

誰が取り除くのか？ わたしが・・・、いいえ、やはり、主から耕される必要があると思います。神様のクワ、神様のスキを入れていただいで、硬く固まった私共の心を柔らかく耕していただく、「」を聞いて十を知る「ほの」

「良い地」に変えていただかねばなりません。主イエスは「神の国」を宣へ伝えても今は無駄に見えても、最後には必ず圧倒的な成果となって実現することを、このたとえで伝えております。そこには終末への期待があります。

礼拝で御言をいへら聞いても、瞬時に、その心が変わらねる程、私共の心は、それほど、柔で単純ではありません。そこには、手間も

時間もかかるかもしれません。しかし、成長させたいお方に全てを委ねなければなりません。御言にはそれ程の大きな祝福が伴っております。

【祈りませ】

父なる神を、肉の力をまっしては、御言を深くにまで受け止めることができません。「新田を耕せ、さすればその中に種をまくな」と求められては、主イエスがわが心をねらひに耕していただく「神の国」を整えていただき、豊かに実を結ぶ地とならせて下さる。主イエスの祈りませ。

